



高齢世代の中国農村女性にみる子どもの価値認識と性別選好の変容と持続（小特集Ⅱ 境界を越える／境界を生きる：日中における移動と社会適応の生活史）

劉，琛瑜

(Citation)

綜合文化, 2:254-270

(Issue Date)

2026-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100504214>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100504214>



高齢世代の中国農村女性にみる 子どもの価値認識と性別選好の変容と持続

劉 琛 瑜
(LIU Chenyu)

1. 問題背景と研究目的

男児選好意識の要因については多様な解釈が存在する。その中でも、「子どもの価値」に関する理論がしばしば用いられ、男児選好意識の持続と変容の要因を解釈する枠組みが提示されている。子どもの家族における価値は、生育意欲や性別選好を規定する直接的な要因であると指摘されている（王 1990；周ほか 2008；方・呉 2024）。

近年の研究では、都市部においてこの意識が徐々に弱まりつつあることが指摘されており、女兒選好やより多元的な性別選好意識への変化が見られるとされる（Shi 2017；方・呉 2024）。この性別選好意識の変化も、子どもの価値に関する認識の変化と結び付けて論じられている。

しかし、既存研究の多くは、その変化を主に生育期にある若年世代に焦点を当て、量的調査を通じて「時代の変化に伴う」マクロレベルの変化として捉えてきた。個人のライフコースにおける人生段階の変化に応じて、子どもの価値に対する理解がどのように変化し、それが性別選好の変化を促す要因となっているのかについては、さらに検討が求められる課題である。

本稿は、このような問題意識に基づき、比較的長いライフコースを歩んできた高齢期の女性に焦点を当て、個人のライフコースにおける子どもの価値に対する認識や性別選好が、どのように変化し、あるいは持続してきたのかを検討するものである。

調査の結果、本稿の事例においては、子どもの経済的価値に対する認識と性別選好意識との乖離がみられ、経済的合理性が必ずしも成立していない状況においても、男児選好意識が持続していることが明らかになった。さらに本稿は、この持続を支えている要因として、精神的価値に着目し、その内実を検討することで、家父長制規範のもとで形成されてきた息子の老後扶養機能を、単なる経済的価値としてではなく、精神的価値の一部として捉え直す視点を提示する。

本稿は、息子／娘という価値づけの境界、経済的価値／精神的価値という

意味づけの境界が、個人のライフコースのなかで内面化され、揺らぎ、再編される過程を描き、「境界を超える／境界を生きる」生活史の一側面を示す。

2. 先行研究

2.1 子どもの価値に関する理論

Leibenstein (1957) は、経済学的アプローチから子どもの価値を消費財、投資財、生産財の三つに分類している。Kagiticbasi (2007) は、子どもの価値をめぐる議論において、経済的価値・心理的（情緒的）価値・社会的価値を挙げている。このように、子どもの家族にとっての価値は、主として経済的価値と、非経済的価値としての心理的・情緒的価値という二つの側面から理解されてきた。

Kagiticbasi (2007) によれば、心理的価値とは、子どもが親にもたらす喜びや誇り、愛情、親子関係における情緒的なつながりに関わる価値を指す (Kagiticbasi 2007; Liu 2021)。これと共通して、王 (1990) も、情緒的価値を、子どもが家庭生活に喜びや情緒的充足をもたらす点に見いだしている。

中国の研究者は、中国の社会背景に基づき、こうした二つの基本的価値の枠組みに加えて、非経済的価値の一つとして「継承的価値」を指摘している (王 1990)。また、これを「文化的価値」とよぶ研究もみられる (方・呉 2024)。ここでいう継承的・文化的価値とは、「伝宗接代 (家系および血筋の継承)」を担う存在として男児を位置づけ、姓の継承や祖先祭祀を行う主体とみなすことを指す (王 1990: 60)。

そして、実利的・経済的価値には、子どもが生産活動を通じて家庭にもたらす直接的な経済的収益と、老後扶養などを担うことによって生じる扶養的効用という側面がある (王 1990; 方・呉 2024; 周ほか 2008)。

中国では男女間の所得格差に加えて、家父長制規範が重要な役割を果たしてきた。この規範のもとでは、男児は老親の経済的資源／財産を継承し、老後を経済的に支える存在とみなされてきたのに対し、女兒はその役割を十分に担いえないとされてきた。このため、男児がもたらす実利的・経済的価値は、女兒のそれを上回るものとして理解されてきた (王 1990: 63)。

このように、中国社会で根強く存在する男児選好意識の要因について、子どもの価値に関する理論に基づいて説明されることが多い。特に、経済的価値に分析の重きを置き、補足的に文化的価値にも言及する形で、男児と比べて女兒の経済的価値の相対的低下や文化的価値の欠如が、男児選好意識を生み出すと指摘されてきた (王 1990; Liu 2021)。

2.2 男児選好の変化およびその要因に関する先行研究

欧米研究では、社会の近代化が進むにつれて、家族にとっての子どもの価値は、実利的・経済的価値から情緒的・心理的価値へと移行すると論じられてきた (Zelizer 1985; Kagitcibasi 2007; Liu 2021)。しかし、中国の一部の研究者は、このような一方向的な移行は中国の文脈には必ずしも当てはまらなないと指摘している。また、ジェンダー差が十分に考慮されていない点も指摘されている (Liu 2021)。中国社会においては、子どもが老後扶養の担い手とみなされることから、子どもの経済的価値が生育意欲や性別選好に依然として強く影響しているとされてきた (周ほか 2008; Liu 2021; 方・呉 2024)。

また、近年の研究では、都市部において男児選好意識が弱まり、女児選好やより多元的な性別選好への変化が見られるとされる (Liu 2021; Shi 2017; 李ほか 2014; 方・呉 2024)。その背景には、社会保障水準の上昇や近代化・産業化の進展により、子どもの経済的価値における男女差が縮小してきたことがあると考えられている。すなわち、経済的価値は依然として重要であるものの、そのジェンダー差は都市部を中心に縮小しつつある (Liu 2021; 李ほか 2014)。

一方、農村部においても性別選好の変化を指摘する議論がみられる。Shi (2017) は、中国東北地域の農村部における生産年齢層の夫婦の性別選好が男児から女児へと転換しつつあることを示した。その背景として経済的要因の重要性を指摘している。

第一に、1970年代後半に始まった市場化改革により、女性の非農業就業機会が拡大し、家庭収入に占める女性の比率が上昇したことが、「女児選好」出現の不可欠な背景となった。

第二に、長い時期の男児選好意識や女性の出稼ぎ労働の拡大により、農村部では男女の人口比が不均衡化し、花嫁不足が深刻化している。その結果、息子の結婚に伴う経済的負担が増大し、これが女児選好を後押しする要因となっている (Siu 1993)。

このように、都市部だけでなく農村部においても、経済的要因が女児選好意識への転換を根本的に促していることが示されている。

つまり、性別選好に関する研究は、男児選好を分析する研究であれ (王 1990; 楊 2012)、女児選好や多元的な性別選好への転換を扱う研究であれ (Liu 2021; 方・呉 2024)、いずれも性別選好を子どもの家庭における価値、特に実利的・経済的価値や収益と関連づけて論じている点に共通性がみられる。

2.3 先行研究の傾向と本研究の視座

上述のような子どもの価値に関する理論研究と性別選好を考察する研究には管見の限り以下のような傾向が見られる。

1. 中国の理論研究は、子どもの価値に文化的価値を組み込んだ点で意義があるものの、男児選好の持続を論じる研究であれ、変化を指摘する研究であれ、その背景要因は最終的に経済的価値へと回収される傾向が強い。文化的価値など非経済的要因への言及もみられるが、実証的に深く検討した研究は依然として限定的である。

2. 性別選好意識や子どもの価値の変化を論じた研究の多くは、特定の時点や生育期にある若い女性に焦点を当ててきた。一方で、個人のライフコースにおける性別選好意識や現実経験に基づく子どもの価値認識の変化に注目した研究はなお乏しい。以上の先行研究と問題意識を踏まえ、本研究では以下のリサーチ・クエスチョンを設定する。

RQ1：

比較的長いライフコースを歩んできた高齢世代の女性たちは、どのような性別選好意識をもち、「息子」と「娘」に対していかなる価値認識を抱いているのか。それらの意識や認識は人生のなかで変化してきたのか、それとも持続しているのか。

RQ2：

性別選好意識や子どもの価値に対する認識はいかに形成され、子どもの価値認識は性別選好意識とどのように関わっているのか。

この二つの問いを解明するために、本稿では、中国農村部の高齢女性を対象に、長いライフコースにおける子どもの価値認識と性別選好意識の変化・持続の実態を検討する。

3. 調査地域と調査対象

本稿で用いるデータは、2025年1月～3月に山西省P県の農村部で行った半構造化インタビュー調査によって得たものである。調査対象はスノーボール・サンプリングという手法で集め、計5名の高齢者女性から協力を得ることができた。対象者たちの基本情報は表1と表2にまとめられている。

表1 インタビュー対象者の基本情報

番 号	出生年	子ども構成	主な経済的基盤	過去の職業
A	1950 年	息子、息子、娘	夫の退職金（毎月約 4000 人民元）	農作業 靴を露店で売る
B	1963 年	娘、息子	夫の出稼ぎによる収入（毎月約 3000 人民元）	農作業
C	1955 年	娘、娘、息子	夫の退職金（毎月約 4000 元）と C 自身の「個人養老保険」（毎月約 1500 元）	農作業
D	1950 年	娘、息子（死去）、娘	娘からの仕送り（毎月約 1000 人民元～ 2000 人民元、貯金する必要がない） 夫（死去）	農作業 朝食の露天販売
E	1949 年	（息子）、娘、息子	E 自身の退職金（毎月約 3000 人民元） 夫（死去）	小学校教師

表2 インタビュー対象者の子どもの基本情報

	出生年	職 業	現在の居住地	扶養状況
A 長男	1969 年	公務員	山西省都市部	別居（近居）／経済支援（次男へ）／看病・介護
A 次男	1971 年	農民工	陝西省都市部	別居（遠居）
A 末娘	1973 年	小学校の先生	山西省都市部	別居（近居）／日常生活の支援や世話／経済支援（次男へ）／看病・介護
B 長女	1988 年	過去：天津の工場での臨時労働（農民工） ／現在：地元での臨時労働	山西省農村部	別居（近居）／日常生活の支援や世話／経済支援（親と弟へ）
B 息子	1994 年	炭鉱で働く農民工	山西省農村部	同居
C 長女	1982 年	医者	山東省都市部	別居（遠居）／経済支援（親と弟へ）／看病・介護
C 次女	1984 年	幼稚園の先生	山西省都市部	別居（近居）／日常生活の支援や世話
C 息子	1988 年	獣医	山西省都市部	別居（近居）／日常生活の世話
D 長女	1970 年	高校教員	山西省都市部	別居（近居）／日常生活の支援や世話／経済支援／看病・介護
D 息子	(14 年前死去)			
D 末娘	1975 年	銀行職員	山西省都市部	別居（近居）／日常生活の支援や世話／経済支援／看病・介護
E 長男	(元夫との子)			
E 次男	1970 年	大学の教員	深圳市	別居（遠居）
E 末娘	1972 年	看護師	山西省都市部	別居（近居）／日常生活の支援や世話／看病・介護

調査地である山西省の農村部の一人当たりの可処分所得をみると、全国平均の 20133 元に対して、山西省農村部は 16323 元（国家統計局 2023）、山西省の村民の経済力は全国の平均より低いことがわかる。山西省は都市化の進展が遅れており、農村高齢者は、社会養老保険や退職金の受給率が低く、子どもへの経済的依存度が高い（徐 2011）。そのため、山西省における「養儿防老（息子を育てることは老後のための準備である）」という観念と男児選好の根強い存在に力添えしているといえる。調査地域である山西省では、出生時男女比は 1964 年に 105.94 と正常範囲内であった。しかし一人っ子政策の導入以降、強い男児選好との相乗効果により、出生時男女比は上昇し続けた。1982 年 108.62、1990 年 109.64、2000 年 112.75、2010 年 113.07 と、長期にわたり正常値を超え増加傾向を示している。このことから、当地では生育期の男児選好が顕著な特徴として継続していると推察できる。

4. 事例分析調査地域と調査対象

4.1 娘の価値に対する認識の変化

Zelizer (1985) は、近代化の進展に伴い、子どもの経済的価値は低下し、情緒的価値が上昇しているとされてきた。中国についても、Fengshu Liu (2016) は同様の傾向を示している。

本稿のインタビュー結果からは、中国農村部における娘の経済的価値は、近代化に伴い低下したわけではなく、むしろ向上していることが明らかとなった。家庭の手助けとしての直接的な経済的価値だけでなく、老後扶養の場面においても娘の経済的価値は上昇している点が注目される。さらに、出生順位が高く経済的に安定した娘は、親だけでなく、きょうだいへの支援も担っている。対象者 A～E の語りからは、娘の経済的貢献を高く評価し、実際に息子を上回る、あるいは劣らないと認識している様子が確認された。

たとえば、ここで C の語りを引用する。対象者は、子どもを産む段階において「娘は嫌だった」と振り返っている。しかし、その後のライフコースのなかで、この認識は大きく揺らいでいく。

若い頃はね、やっぱり息子がいなかったら、この先どうやって生きていくんだろうって、本気で思ってたんだ。女の子が三人続いたときは、もう希望もないし、頼るものもないなって。娘が嫌だった。コンプレックスがあった…まさかね…結局、長女がいなければ私は命もなかった (C)

C は数年前に癌を患い、山東省の都市部の病院に勤務している長女に引き取られてその自宅で療養した。治療の数年間、費用 (30 万人民币ぐらい) も介護もすべて長女が担い、その支えにより回復に至った。経済的な支えに加え、がんを患った際の強い不安のなかで、医者である長女がずっとそばにいて「私がいれば、お母さんは必ず元気に戻れる」と語りかけたことが、大きな安心感をもたらしたと振り返っている。

さらに、C によれば、長女は両親への支援に加え、弟の結婚に際して多大な経済的援助を行った。たとえば、息子が結婚した際には、長女は故郷の県城で購入した自宅を息子に譲り渡した。また、息子が結婚した後、買い替える予定だった古い車を息子に贈ったという。つまり、C は娘の「養老」や「看病」における経済的・情緒的貢献を高く評価するとともに、弟への支援を通じて家族全体に果たす経済的貢献を肯定している。

また、インタビュー対象者の B も C と同じく娘の経済的価値を高く評価し、こう語った。

いくら「嫁に出した娘はこぼれた水」と言われようとも、私の娘は決してそうではない。娘は息子の結婚と家の新築のときに、8万元も出してくれたのだから（B）

Bの娘は高校卒業後に天津へ出て働きに出ており、長年にわたって外で働き、時折家に仕送りをしていた。

このように、Bは、娘が実家に対して行ってきた経済的な貢献を列挙することで、娘がこの家の「こぼれた水」ではなく、よそ者ではないことを証明しようとしている。

また、EはCと同様に、Bより年齢が高く経済的にも安定しているが、娘の「養老」や「看病」における経済的価値をとくに強調して評価している。

E夫婦はいずれも村の小学校教員として勤務しており、退職後は退職金を主な生活基盤としている。このような両親の日常生活の経済的自立度が高い家庭にとって、真に子どもからの経済的支援や介護が求められるのは、両親の身体的機能が低下し、老後の生活維持や医療的対応が具体的課題として浮上する段階である。

Eによると、夫の「養老送終¹」を担ったのは息子夫婦ではなく、娘夫婦であった。当地では、臨終を迎える者は息子の家で養生し、息を引き取るべきとされ、娘の家で亡くなることは「縁起が悪い」とみなされてきた。しかし、Eの娘夫婦はこうした規範にとらわれず、病に伏した父親を自宅に迎え入れ、数年にわたり介護し、最期を迎えられるよう支えた。

Eの説明によると、娘夫婦がそのように行動したのは主に二つの理由があった。

第一に、娘は県の病院で産婦人科の看護師として、婿は同病院の医師として働いており、医療的知識の面で息子たちより優れていた。Eの二人の息子は、一人は生活が苦しく忙しい状況にあり、もう一人は他省に定住しており、距離が遠いため頻繁な介護が難しかった。対照的に、近隣に住む娘のほうが、通院や日常的な世話を担う上で圧倒的に便利だった。

第二に、より深い情緒的関係が背景にある。Eによると、娘の夫は母子家庭で経済的に困窮しており、結納金を支払う余裕がなかったため、E夫婦は結納金を受け取らず、結婚式費用の大半も負担した。その結果、婿はE夫婦に対して深い感謝の念を抱き、実の両親のように慕っているという。

このように、Eは息子夫婦よりも、娘夫婦のほうがこの家に対して実質的・情緒的の両面でより多くの貢献をしていると捉えている。

Eと同様に、Aにとっても、娘は「結婚すれば他家の人間となり、あまり期待できない存在」であると捉えられていた。しかし実際には、娘は経済的価値に加え、情緒的価値の担い手としても重要な位置を占めている。

1

「養老送終」とは、親の老後扶養から葬儀までを含む包括的な家族的義務を指し、伝統的には息子に帰属するものと理解されている。

Aは生涯の大半を農業労働に従事してきた。夫は退職前は小学校の教師であり、現在の生活は主に夫の退職金により安定している。

かつては次男一家を積極的に支えていたものの、次男が農民工として長期出稼ぎに出るようになり、夫婦自身も高齢期に入った現在では、村で二人暮らしを続けている。むしろ娘が毎日県城から村へ通い、両親の洗濯や食事の世話を担っている。日用品や衣服なども、多くは娘が気を配って補っている。

また、Aによれば、末娘は次男への援助まで担っており、家族に対する経済的貢献は長男に劣らないという。過去に次男が鶏や羊の飼育事業を行っていた際の資金も、実際には長男と娘からの借入によって賄われていた。

また、Dの状況はやや異なり、14年前に息子を亡くしており、現在の生活はほぼ2人の娘に頼っている。

このように、インタビュー対象者のほぼ全員の語りには、娘が実家に対して経済的・情緒的の両面において重要な役割を果たしているという認識が一貫してみられる。

彼女たちは息子と娘の価値を直接比較することを避け、息子に対する否定的評価を明示することも少ない。むしろ、「息子の家は貧しく、あの人も苦労しているの。もう精いっぱい頑張っているんだから (B)」、「息子は生活のために忙しく働いているから、せめて自分の家庭を支えてくれればそれで十分。あの子は本当に親孝行な子なのよ (C)」、「男なんだから、大変なのよ。嫁さんもいて、子どもも何人もいて、この世の中で生活していくのは簡単なことじゃない (A)」、「うちの息子一家はもう他省で暮らしていて、あまりにも遠くてね。どうにもならないのよ (E)」といった発話を通して、息子を理解し擁護しようとする姿勢がみられる。

しかし、直接比較することは避けながらも、経済的収入源について具体的に尋ねたり、家族内の重要な事柄について語ってもらったりすると、娘が家族の中で重要な経済的・情緒的役割を果たしていることが明確に浮かび上がる。語りの中からは、娘が日常的なケアや介護・看病といったさまざまな場面で欠かせない存在となっている様子がうかがえる。こうした娘の貢献は、単に親への支援にとどまらず、家庭内の男きょうだいへの経済的援助にまで及んでいる。

4.2 親から成人の息子への支援

先行研究（魏 2011）でも示されているように、現在の農村家庭では、息子の結婚に際して親が経済的責任を担うことが慣行化している。たとえば、高額な結納金や住宅費用の負担などがその典型である。こうした行為は、「フィードバック関係」に基づく世代間の義務として理解されており、親は息子の結婚を支援する義務を負い、その見返りとして、息子が親の老後における扶養

責任を果たすべきだと考えられている。

本稿の調査によれば、このようなフィードバック関係は、現実の生活の中ではしばしば不均衡なものとなっている。息子がすでに結婚し、自らの核家族を形成し、さらに子どもを持っている場合であっても、親が高齢になっなお、息子のために孫の世話はもちろん、息子の家庭に対して継続的に経済的支援も行っている事例が多く見られた。しかも、これは安定した収入を有する親（A、C、E）に限られない。定期的な収入源を持たない親が、子どもから経済的援助を受けるところか、むしろ自ら出稼ぎに出て、自身および息子家族の生活費を補っているケース（B）さえ存在する。

ここでは、長年にわたって次男一家の生活を支援してきた対象者Aの事例を取り上げる。

Aは生涯のほとんどを農業労働に従事してきた。次男が結婚した時、Aはまだ五十歳にも満たなかった。息子の結婚資金や新居の改装費を工面するため、彼女は外に出て靴を売る露店商を始めた。その後、孫の誕生を機に商売をやめ、家に戻って孫育てと農作業を行うようになった。次男の家計は長年厳しく、A夫妻は自らの生活を退職金と貯蓄でまかないながら、生活費の援助に加え、孫の養育や家畜の世話、畑仕事などを通じて、次男一家を継続的に支えてきた。Aは高齢になっても、孫育てに加え、息子のための家畜の世話や畑仕事を続けている。しかし、こうした支援の集中は長男の強い不満を招いた。特に父親の体調が悪化するなかで、その世話を主に長男と娘が担う状況に対し、長男は不公平感を募らせていた。

このように、現在、親による息子への経済的支援は、結婚後も途切れることなく継続し、「息子を結婚させる」という義務を果たした後もその終点を見出すことは難しい。むしろ息子が家庭を構えていても、必ずしも経済的に自立しているとは限らず、さまざまな形で親の資源に依存し続けている傾向が確認された。

このような現象は、息子の家庭が経済的に困難な場合に限られるわけではない。Aの息子のように生活が苦しい事例だけでなく、経済的に比較的安定した家庭においても、同様の世代間支援のパターンが観察される。

たとえば、Cの息子夫婦は地元で就労しており、息子は獣医（月収約7000元）、妻は小学校教師で、二人の娘がいる。経済的には一定の安定があるようにみえるが、Cは現在も息子一家に対し生活費の援助を続けている。

C夫婦の収入源は、夫の退職金（月約4000元）とC自身の「個人養老保険」（月約1500元）である。こうした限られた貯蓄と収入は、現在も自身の生活だけでなく息子一家の支援に充てられている。たとえば、Cは「嫁が子どもの学校の送迎に不便そうだった」と考え、貯蓄から自動車を購入したという。さらに最近、Cが甥に2万元を貸した際、嫁から「そんなにお金があ

るなら、どうして私たちに使わないの？」と強い不満を示された。息子夫婦が、親からの援助を既定のものとして受け止めるようになっている状況がうかがえる。

AやCのように親がある程度安定した収入を有する家庭だけでなく、農村には、B家のように夫婦とも定期的な収入や保障を持たない世帯も少なくない。こうした、農業労働に従事してきた経済的に困難な高齢者のなかには、老年期に入ってもなお、息子の婚資や生活費を補うために出稼ぎ等の肉体労働を続けざるを得ない者がみられる。Bの息子夫婦は結婚後5年が経つが、Bの夫と息子は長期間出稼ぎに出ており、家にはほとんどいない。

このような事例は、農村家庭において、親による息子への経済的支援が結婚前の「婚資の準備」ととどまらず、老年期にまで及ぶ持続的な支援へと拡張していることを示している。その結果、世代間支援関係、フィードバック・モデルにおいて「倒置」や「延滞」が生じている。すなわち、「親が息子を支える」という関係はライフコースの後期に至ってもなお持続しており、一方で「息子が親を扶養する」という段階は遅延し、あるいは欠如している状況がみられる。

また、このようなフィードバックの不均衡はジェンダーによっても異なり、息子に対しては長期的かつ相対的に大きな支援が向けられる一方、娘は同程度の資源投入を受けていない場合がある。さらに娘が家族内の追加的な支え手として機能していると解釈しうる事例（A、B、C、D、E）も確認された。

4.3 強い男児選好の持続

性別選好——すなわち「女兒と男児のどちらを望むか」という問い——に対しては、「男児がいなければならない」と考える傾向が広く確認された。対象者たちは全員娘の経済的・情緒的価値の高さを認めつつも、依然として強い男児選好を持っている。彼女たちは娘の成長や自身のライフコースの進展に伴い、娘の価値に対する認識を高め続けてきた。

しかしながら、こうした価値認識の変化は性別選好意識の根本的な変容にはつながらなかった。強い男児選好は持続しており、それは子世代や孫世代に対する性別選好に明確に示されている。こうした傾向は、質問への単純な回答にとどまらず、日常生活における具体的な実践の中にも明確にあらわれている。

たとえば、Cの事例においては、その強い男児選好が自身の生育期から次世代に至るまで一貫して持続している。

Cは結婚前、村の婦女隊長として「子どもを一人だけ産む方が良い」「男児を産んでも女兒を産んでも同じである」といった政策理念の普及に携わっていた。しかし結婚後、男児を得られなかったことから、強い男児選好に基づ

き出産を重ね、出生した女兒を面識のない隣村の家庭に送るという決断に至った。その後、出産制限に違反したとして行政処分を受けたものの、最終的には男児を得ている。

Cのその強い男児選好は、自身の出産経験だけでなく、孫世代に対する性別選好にも明確に表れている。

Cの一人息子にはすでに二人の娘がいる。第一子誕生後、Cは息子夫婦に「もう一人産むよう」強く求め、さらに第二子も娘であったため、その要求は一層強まった。現在も三人目の出産を繰り返し促しており、「生まれたら私が育てるから、心配しないで産みなさい」とまで保証している。しかし、C自身は健康状態が優れず、育児を担うことは現実的に困難である。それにもかかわらず、息子夫婦はこれ以上の出産に消極的であり、Cはその状況に不安と焦燥を募らせている。

Cと同様に、一人っ子政策という制度的制約のもとでも強い男児選好を維持し、その選好が多様な対応策を取らせるまでに至ったAの事例もみられた。

Aの場合、長男が子どもを持つ1990年代末から2000年代初頭にかけて、一人っ子政策は依然として継続しており、その厳格な適用を受ける立場にあった。孫が女兒であったことに対し、Aは強い不安を抱き、男児出産を強く望むようになった。

こうした状況のもと、Aは男児出産を実現するための一つの対応策として、長男夫婦に対し、出生した女兒を次男夫婦に託すことを提案した。次男は農村戸籍であり、当時の制度下では第一子が女兒の場合に第二子の子が認められていたためである。この提案に対し、長男の妻は実子を手放すことへの強い抵抗からこれを拒否したものの、Aはその後も数年にわたり男児出産の必要性を訴え続けた。

最終的に、長男夫婦は約7年後、政策に違反する形で密かに第二子となる男児を出産している。

つまり、インタビュー対象者のライフコースにおける子どもの価値に関する認識と性別選好の変化・持続の経験から「子どもの経済的価値の認識」と「性別選好意識」との乖離が見られる。

4.4 なぜ男児選好が続いているのか—息子の精神的価値の内実

これまで多くの研究が現実的な面から農村家庭における息子の実際的意義を説明している。そしてそれに基づいて男児選好意識の存在原因とその合理性を説明してきた。

筆者はインタビュー対象者たちに、男児選好の理由を尋ねた。その際、対象者たちの回答には、現実生活における実利的な側面よりも、むしろ象徴的・精神的な側面を強調する傾向が見られた。

その「精神的価値」の内実は、大きく二つの側面に分けられる。

まずは、家父長制規範の内面化による安心感が確認された。

中国において、家父長制は父姓制、父方・夫方居住制、父系相続規範（父系制）という三つの絡み合う構成要素に支えられており、父系家族と男性を中心に構築されており、男性優位のジェンダー規範を持っている（李 2012；李 2020）。これらの規範の下では、男児の誕生は父系家族の存続と直結するものと理解され、資源配分も男性利益優先の原則に基づいて行われる（李 2012）。

女性は結婚によってその帰属が変更され、生家から排除される「よそ者」として親の財産を相続する権利がなく、祖先祭祀をする資格がなく、死後生家において祭祀を受けることはない。「嫁に行った娘は、撒いた水と同じ」ということわざは娘の父系家族における立場をよく表したものとされている（植野 2011）。一方で、男性は家族の後継者として財産相続の権利を有すると同時に、祖先祭祀や親の扶養を担う義務を負う。

「ご自身も娘として両親を支えてこられ、いまは娘さんも大きな役割を果たしていると思います。そのうえで、それでもなお『息子がいなければならぬ』と感じるのは、どのような理由からでしょうか。」——この問いに対して、彼女たちが示した説明は次のとおりである。

それは、ただ私の娘が有能でしっかりしているからにすぎない。けれど息子というのは、できが良かろうと悪かろうと、親の面倒をみるのは当然のことなのよ。(D)

（孫息子）男児だと、たとえどれほど出来が悪く、頼りにならなくても、息子であることに変わりはない。将来はきっとどこかで役に立ち、頼れる時が来るものだ。(A)

うちは、たまたまちょうどいい娘と婿がいるから助かっているだけよ。男の子がいれば、将来の保証になる。もし息子が親孝行しなかったら、それこそ情理に合わない。周りからは指をさされるに違いないよ。娘なら、結局はその人の良心に頼るしかないの。(E)

このように、対象者の女性たちが家父長制規範を内面化している様子が窺える。彼女たちは、「娘は撒いた水」（泼出去的水）という観念を、ミクロレベルの自分自身や自分の娘に関しては否定しているものの、この観念がより広い社会的文脈において持つ合理性や存在そのものを否定しているわけではない。彼女たちは、自分の娘が特別に“できがよく有能だから頼れる”と考

える一方で、息子という存在については、息子の資質や成否に関わらず、規範に基づいて当然に親を扶養し世話する義務を負っていると考えている。

家父長制的規範が息子の義務を規定しており、その規範を内面化している対象者にとって、「息子が老後を支える」「息子がいれば将来の保証になる」という感覚は、その男児が実際に将来どれほど信頼できるかというミクロな現実判断に基づくものではなく、むしろ家父長制的規範によって付与された精神的な安心感に依拠している。ミクロな現実レベルの経済的価値の判断を超えて、精神的・象徴的な意味を帯びている。

また、その「精神的価値」のもう一つの内実は、宗教的・形而上学的次元における精神価値として位置づけられることが確認された。宗教的な信念や死後の世界への配慮も、男児選好意識を支える精神的基盤となっている。

たとえば、Cは自分の男児選好の理由についてこう語った。

息子がいれば、少なくとも春節には家に残って春聯²を貼ってくれる人がいるから。私はそれを息子にも繰り返し伝えてきた。(C)

2

春聯：中国で、春節を祝うために正月にめでたい文句を赤い紙に書いて門口に張るもの。

この発言は、一見するとささやかな日常の願望のように見える。しかし、その背後には中国社会に深く根付いた文化的規範が反映されている。当地社会においては、春節（旧暦の正月）に嫁いだ娘が実家に泊まり、両親とともに年越しを迎えることは忌避され、大晦日と1月1日を実家で過ごすことは不吉とされてきた。さらに、春節の場において家の正門に春聯を貼る役割は、伝統的にその家の男性成員が担うべきとされてきた。したがって「春聯を貼る人がいる」という言葉には、単なる労働の代行以上の意味が込められており、息子の存在が家の継続や繁栄を象徴するものとして期待されていることを端的に表している。

また、Dはこう語った。

実はね、村の人たちは今でも裏でいろいろ言うのよ。みんなこう言うの。『あの人は今でこそ二人の娘に孝行されて、お金にも困らず、食べるものにも事欠かない。でも、どんなに暮らしが良くて、あの人には“将来”がない。希望のない人だ』ってね。(D)

筆者が「その『将来』というのは、どういう意味ですか？二人の娘さんがいれば、老後の面倒も見てもらえるのでは？」と尋ねると、Dはこう答えた。「ここで言う“将来”というのは、私が死んだあとの世界のことよ。」(D)

当地では、葬儀を取り仕切るのは息子の役割とされ、清明節の祖先祭祀を

含む死後の一切の儀礼は息子が担うことになっている。息子がいない場合には、同姓同宗の親族の男子に頼んで葬儀を執り行ってもらうしかなく、たとえ実の娘がいても、その役割を果たすことは認められていない。娘は祭祀の場から排除されているためである。

つまり、息子がいないということは、死後に自らが祀られる「帰る場所」が失われることを意味するのである。

5. 考察

本稿では、中国農村部の高齢期の女性たちを対象とし、ライフコースにおける子どもの価値認識の変化と性別選好の持続を検討した。とくに、「息子を産んだ後、現実はどうであったのか」という問いに立ち返り、ライフコースを通じて蓄積される具体的経験にもとづく息子／娘の価値認識に着目することで、性別選好と子どもの価値認識との関連をより精緻に把握する視座を提示した。

考察から得られた知見は二点集約できる。

一点目としては、子どもの実利的・経済的価値に対する認識と性別選好意識との乖離が確認された。対象者たちは娘の経済的・情緒的価値を高く評価しているにもかかわらず、依然として強い男児選好を保持しており、子どもの価値認識の変化が必ずしも性別選好の変化に直結しないことが明らかとなった。

分析をさらに深めることで、この乖離から浮かび上がるのは、家族内の資源流動が不均衡であり、性別に基づく優先順位が暗黙のうちに維持されているという構造である。

以下では、この点についてより詳細に検討する。

本調査では、息子が結婚・就業し核家族を形成した後も、親が息子に対して経済的・生活的支援を継続している事例が多く確認された。先行研究（魏2011）でも、農村家庭において「恩は下へ流れる（恩往下流）」現象が一般化しており、親から子への支援が子から親への返報を大きく上回る傾向が指摘されている。同時に、孝道の変容によって、伝統的な扶養観念が徐々に希薄化していると指摘されている。ただし、これらの議論は多くの場合、「子ども」というカテゴリーを一括して扱い、その内部に存在するジェンダー差を十分に検討してこなかった。

また、Becker（1991）によれば、親は時間や金銭といったその世帯のさまざまな資源制約下で、子どもたちの生涯所得が最大化するように行動する。両親は少なくとも一人の子どもが社会的な向上を経験することで家族の社会的地位を向上させようとしている。このため、親は最も投資へのリターンが

大きい子どもに多くの資源を割くようになる。ここでもし男の子の方が女の子よりも所得水準が高い場合、親は男の子の方に世帯の資源をより多く投入すると考えられる。

本稿の調査結果によれば、親による子どもへの資源配分は、経済的合理性や効率性に基づく最適化行動として一義的に説明できるものではない。親は必ずしも「投資リターン」に基づいて各子どもの貢献度や将来的な見返りを理性的に比較・調整して資源を配分しているとは限らない。むしろ限られた資源を、「もっとも経済的支援を必要とする」と認識された子どもに集中させる傾向が見られる。そして、本稿の事例が示すように、現実には「もっとも支援を必要とする者」とみなされるのは、多くの場合、息子であり、なかでも経済的困難を抱え、自立して家庭を維持することが難しい息子である。

このような状況のもと、かつてみられた「親から息子へ」と「息子から親へ」という単線的な支援関係——いわゆるフィードバックモデル——とは異なり、現在の調査地域の農村部における複数子家庭では、娘が親を支え、その親が継続的に息子へ資源を投入するという循環構造が形成されつつある。この循環は、家族内の資源が相互扶助的あるいは均衡的に循環するのではなく、息子へと一方向的に偏在する資源流動を生み出す仕組みとして機能している。息子は親に対して十分な見返しの能力を持たない場合であっても、依然として「優先的に支援・投資されるべき存在」として扱われ続けている。こうした資源の流動パターンは、息子優先の文化的規範を揺るがすどころか、むしろ実践の次元において家庭内の性別不平等を結果的に強化している可能性があるといえよう。

二点目として、精神的価値を中核とする男児選好意識の持続が確認された。

先行研究では、非経済的価値として主に情緒的価値と文化的価値が言及されてきた。しかし、本稿の事例から浮かび上がる男児選好の存続理由は、これらの枠組みだけでは十分に捉えきれない側面を含んでいる。そこで本稿では、そうした側面を捉えるため、「象徴的・精神的価値」という視点を提示する。

対象者たちの語りから、その精神的価値の内実には主に二つの側面が含まれることがわかった。

一つは、家父長制規範の内面化によって生じる精神的な安心感である。先行研究が提示してきた「情緒的価値」——すなわち、子どもという具体的個人が、親との関わりや、喜び・満足感をもたらすことを通じて、親や家族にもたらす肯定的な感情経験——とは異なり、本稿から浮かび上がった「息子がいることによる精神的な安心感」は、息子本人の存在そのものに由来するものではない。むしろそれは、息子やその婚後家族との関係が不安や葛藤を伴う場合であってもなお、社会的に共有される秩序の規範に支えられている。

中国の家父長制規範により、息子が親の「養老送終」³を担うべき存在とされてきた。こうした規範的理解に基づき、対象者たちが抱く「息子・孫息子は将来の保証になる」という感覚は、必ずしも現実的経験に支えられた判断ではなく、むしろ家父長制規範の内面化によってもたらされる象徴的な安心感として機能していると考えられる。「養児防老」は、男児の価値をめぐる先行研究が前提としてきたような現実には担保されうる経済的機能というよりも、精神的価値および心理的安全感に近い性質を有していることが明らかとなった。今日の中国社会において、本稿は、家父長制規範のもとで形成されてきた、いわゆる息子の老後扶養機能を、単なる経済的価値としてではなく、精神的価値の一部として捉え直す視点を提示する。

もう一つの側面は宗教的・形而上学的な精神価値である。宗教的な信念や死後の世界への配慮も、男児選好を支える精神的基盤となっている。とくに老年期においては、「将来祖先として祀られること」への願いが、男児の存在価値を支える精神的要素として作用している。

先行研究では、「伝宗接代（家系、姓や血筋の継承および祖先祭祀）」のような価値を、男児に固有の文化的価値として位置づけ、それを経済的価値以外に存在する男児選好の理由として説明してきた。しかし、この枠組みには、「家の後継者や祖先祭祀を行う主体となる文化的価値は男児に与えられ、娘は文化的価値という点で先天的に不利である」という本質主義的な理解が暗黙の前提として置かれている。本稿では、「伝宗接代」や「死後に祖先として祀られる」といった形而上学的な観念を、家父長制的規範との交錯のなかで形成され、実践を通じて再生産される精神的価値として捉えることを試みる。

中国農村部の家庭が「お金は足りるのか」「老後の世話は誰がするのか」「将来はどうなるのか」といった不確実な問題に直面するとき、人々は単に「経済的な計算」によって安心を得ようとするだけではない。むしろ、社会的規範を通じて、安心感や秩序感を補強しようとする傾向がみられる。

その結果、「息子をもつこと」は、現実生活中的の実利的な面における労働力や老後扶養の資源としての意味（経済的側面）にとどまらず、「心の拠りどころを得る」といった象徴的・精神的な価値を付与される。このような象徴的意味づけこそが、不確実な生活状況に対する人々の精神的な対応戦略として機能していると考えられる。息子の経済的役割を否定するものではなく、むしろ社会保障が不十分で経済的リターンが不確実となる状況において、農村家庭が息子の象徴的・精神的価値を強化することで、現実とのギャップを補おうとしている可能性が示唆された。

以上、本稿は、中国農村部の高齢期の女性に焦点を当て、個人がライフコースにおける子どもの価値に対する認識や性別選好、その変化と持続を検討した。ただし、本研究は特定地域の高齢女性に限定されているため、その一般

化には慎重を要する。今後は、比較研究や他世代を含む検討を通じて、男児選好の変化と持続の過程をより精緻に明らかにしていく必要がある。

【参考文献】

- Becker, Gary S., 1991, *A Treatise on the Family*, enlarged edn, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 方英, 吳涵菁, 2024, 「從男孩偏好到多元偏好的轉變及影響因素」『中華女子學院學報』2: 121-128.
- Gagiticbasi, Cigdem, 2007, *Family, Self and Human Development across Cultures: Theory and Applications*, 2nd edn., London and New York: Psychology Press.
- Leibenstein, Harvey, 1957, *Economic Backwardness and Economic Growth: Studies in the Theory of Economic Development*, New York: Wiley.
- Liu, Fengshu, 2016, "The rise of the 'priceless' child in China," *Comparative Education Review*, 60(1): 105-130.
- Liu, Jieyu, 2021, "Childhood in urban China: A three-generation portrait," *Current Sociology*, 70(4): 598-617.
- 李慧英, 2012, 「男孩偏好与父權制的制度安排——中国出生性別比失衡的性別分析」『婦女研究論叢』2: 59-66.
- 李樹茁, 胡瑩, 闫紹華, 2014, 「当代中国家庭生育性別偏好的影響機制研究——基于六普数抛的实证分析」『人口与發展』5: 69-76.
- 李慧英, 2020, 「我国農村集体父權制的成因与運作」『山東女子學院學報』6: 55-62.
- Siu, Francis, 1993, "Reconstituting Dowry and Brideprice in South China," Deborah Davis and Stevan Harrell eds., *Chinese Families in the Post-Mao Era*, Berkeley: University of California Press, 165-188.
- Shi, Lihong, 2017, *Choosing Daughters: Family Change in Rural China*, California: Stanford University Press.
- 植野弘子, 2011, 「父系社会を生きる娘——台湾漢民族社会における家庭生活とその変化をめぐって」『文化人類学』75(4): 526-550.
- 魏伝光, 2011, 「中国農村家庭“恩往下流”現象的因果鏈条分析」『内蒙古社会科学』32(6): 140-144.
- 王俊祥, 1990, 「孩子的價值及对孩子数量、素質和性別的選择」『中国人口科学』2: 60-63.
- 徐勤, 2011, 「農村老年人家代際交往調查」『南京人口管理幹部學院學報』27(1): 5-10.
- 楊春華, 2012, 「農村家庭教育策略中的性別差異——“保男顧女”的資源分配原則」, 『教育教學論壇』, 2012(02): 7-10.
- Zelizer, Viviana A., 1985, *Pricing the Priceless Child: The Changing Social Value of Children*, New York: Basic Books.
- 周俊山, 尹銀, 王樹新, 潘琴, 2008, 「拉薩市已婚育齡婦女的孩子價值觀念分析——兼論婦女地位和生育文化对孩子價值的影響」『人口与發展』14(6): 39-46.

(一橋大学社会学研究科地球社会研究専攻博士後期課程／
家族社会学・ジェンダー社会学)